

# タンパク漏出性腸症からみる 消化管リンパ腫と慢性腸症

甲斐勝行

（岐阜大学客員教授，かい動物病院院長）

## はじめに

慢性の下痢・嘔吐の犬・猫を精査することで得られる最も一般的な病理組織学的診断は，炎症性腸疾患，腸リンパ管拡張症，そして消化管リンパ腫である。近年，臨床病理学が進歩してきたことや消化器内視鏡が普及してきたことにもよると思われるが，このような腸疾患を診断する頻度が非常に増えているように思われる。臨床的には，持続するあるいは再発を繰り返す下痢や嘔吐，さらに体重減少を伴う症例の血液検査において血漿アルブミン値の低下がみられた場合，原因にかかわらず上記3つの病態を疑って内視鏡検査や試験的開腹術を実施するケースが多い。しかし，これまで研究者や臨床家によって幾度となく議論されてきたように，これらの疾患の鑑別診断や難治性症例への対処には苦慮する 경우가多く，一般臨床獣医師にとっては検査，診断，治療を通じて非常に悩まされることが多い。また，血漿アルブミン値が軽度低下していた動物が，数カ月後に重度の炎症性腸疾患や消化管リンパ腫と診断された症例も筆者は経験しており，軽度でもアルブミン値の低下は重要な臨床所見と考えている。今回は，これらの疾患に対して，一般臨床獣医師がどう対処していくのが妥当なのか，臨床上どこに問題点（困難）があるのかについて述べることにする。

なお，本稿では，リンパ腫については消化管壁に形成されるリンパ腫を中心とした内容であり，肝臓や脾臓も関連したいわゆる消化器型リンパ腫と区別して「消化管リンパ腫」とした。また，慢性的な胃腸疾患にはさまざまな病態が含まれるが，とくに今回は腸リンパ管拡張症，慢性腸症，炎症性腸疾患を取り上げた。以下にタンパク漏出性腸症，腸リンパ管拡張症，炎症性腸疾患，消化管

リンパ腫について概説し，最後に実際の症例を紹介する。

## タンパク漏出性腸症

タンパク漏出性腸症（protein-losing enteropathy：PLE）は，慢性の下痢（時に嘔吐）および消瘦を主症状とし，血漿タンパクやリンパ液が消化管腔へ漏出する疾患であり，ヒト医学では3つのグループに分類されている。すなわち，(1)腸管腔でのタンパク漏出を引き起こす過剰な透過性亢進を伴う粘膜の非損傷性変化，(2)続発性にタンパク滲出を伴うびらんや潰瘍を含めた粘膜損傷病変，(3)腸においてタンパクに富むリンパ液の漏出を伴うリンパ管の機能不全（腸リンパ管拡張症）である。これらの病因論は動物にも当てはまると思われるが，明確に区別した報告は多くない<sup>1)</sup>。

腸リンパ管拡張症や消化管に関連する腫瘍（リンパ腫，腸腺癌など）は，リンパ管を圧迫してリンパ液の還流障害を起こすことによってリンパ液の漏出を生じる。また，心不全などの循環不全を伴うもの（フィラリア症などの右心不全など）も，リンパ管の還流障害を引き起こし，本症の原因になるとされている。さらに，消化器粘膜のびらんや潰瘍はもとより，炎症性腸疾患やその他さまざまな疾患（寄生虫，ウイルス，真菌の感染，イレウスなど）では，傷害された粘膜からタンパクが漏出することとなる。

タンパク漏出性腸症はこれらの原因疾患による二次的な症候名である。消化管粘膜においてリンパ液の還流障害，粘膜上皮損傷，血管の透過性亢進，および中等度以上の出血を伴う疾患であれば，タンパク漏出性腸症の基礎疾患となりうる（表1）。結果として低タンパク血症